
「休日」

白紙 優真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「休日」

【Nコード】

N0608R

【作者名】

白紙 優真

【あらすじ】

一人の高校生の日常を個人の視点で描いた作品です。まったくの力不足は承知です。

何を目的としたわけではなく、何となくああ、俺もこんなところあるなど共感して頂ければ嬉しいです。

そして、読者様からの感想や批評を貰えたらなお、嬉しいです。感想待っています。

僕は休日の過ごし方を知らない。

一週間の最後の日、土曜は高校生である僕にとって休みだ。

その日は平日とは違い、学校に通うためと早く起きる必要はない。だから、いつも遅くまで起きない。

遅めに起き、遅めの朝食を食べると、すでに正午まで2時間もない。

はあ、もっと早く起きれば何かやることできたのに、といつも後悔をしてしまう。

遅く起きても問題はないが遅すぎでは後悔をしてしまう。

結局、録画しておいたアニメなどを鑑賞して、昼食までの2時間を過ごす。

昼食はカップヌードルとだいたい決まっている。

母と二人っきりで住んでいる僕にとってはこれも家庭的な味に感じてしまう。たまに気が向けば料理をする。だが、男が作るようなものはそんなに大したモノではない。もちろん、手先が器用だとかの理由で料理が上手い奴もいるが、残念ながら僕はその部類には入らない。

ガサガサとビニール袋から買いだめしておいたカップヌードルを取り、今日食べたい味を探し求める。

そんなにたくさん種類があるわけではなく決めるのには何分とかからない。

わざわざやかんにお湯を沸かして入れるのも面倒なので少し温いかもしれないがポットのお湯で我慢する。

蓋を空けて中にあるかやくやら液体スープなどの袋を取り出して、カップの中にお湯を注いでいく。

蓋の側にある溝までお湯を張ると蓋を閉めて、先程取り出した袋類を蓋の上に乗せて、重しのかわりにする。

3分経つまでは一時停止しておいたアニメの続きを見はじめる。ついつい見入ってしまい、5分後くらいに蓋を空けてスープを入れて食べはじめる。

決して旨いとは言えないが3分で出来るならばこんなものと妥協をして、最後のスープを飲み干した。ふと窓の外を見ると雪が降っている。

灰色の空からたくさん白い綿のように雪が降りてきて、グレーの道路に音もなく留まる。

これぐらいなら積もらないな、と勝手に見積もる。積もってしまつと雪掻きをしろと言われてしまつ。またアニメの続きを見ようとテレビの前に座る。

現在時刻12時30分。親は仕事に行っていて7時前まで帰ってはこない。

アニメが終わると借りておいたDVDを再生し始める。今回は洋画だ。去年、人気だったこれを見て、面白いと思い、衝動的に借りてしまった。

1時30分。映画は終わった。そこそこ面白かった。だが、わざわざ映画館まで行くようなモノでもない。

ふあと欠伸をして、居間にある炬燵に潜った。

足を炬燵に入れて上半身は毛布に包まり、頭の下には枕を敷いた。昼寝は休日の日課である。

一週間でたまった疲れをこの1時間で抜き取った。眼が覚めると頭がくらくらして、たまに歯が痛くなっている。昼食後の歯磨きのし忘れなのだろうか。

2分ぐらいゴシゴシと歯を磨く。

そして、また炬燵に潜った。

今度は先週書店で買った小説を読みはじめた。

世界中で大人気のその小説は魔法使いが主人公で映画にもなつて

いる長編大作である。

前に映画を見たことがあったので頭の中に登場人物のイメージが
どんどん沸いてきて、スラスラと読めた。

半分ぐらいまで行くとコトンと首を落とし、眠りに入ってしまう。
本を読んでいると昔から必ず睡魔に狙われる。

30分後、再び起き上がると、また寝てしまったかと後悔をしな
がら、次のページをめくった。

本はいろいろなことを教えてくれる。

最近では全く読まなくなってしまうたが、小さい頃は脇に必ず本
が置いてあった。

また、コクコクと船を漕いでくると、体を抓ったりしながら眠気
を吹き飛ばす。

最後まで読み終わると、僕は仰向けになり、眼をつむる。

読後の余韻が僕は好きだ。どんな本を読んでもこの感覚を味わう
ことができた。

500ページもの分厚い本を読み終わったという達成感と本が起
こしてくれる感動、この読後感は何と表現するべきか悩む。

もしかしたら僕しか感じないのだろうかと思うこともたまにあっ
たりする。

こうやって一日中ダラダラと過ごしても何にも満たされた気分
はなれない。自分が冷めてるからなのだろうか。

やはり僕は休日の過ごし方を知らない。

もう19時になるうとしている。

だが、母はまだ帰ってこない。

なんだか、今日は誰かに早く会いたい気分だ。

きつと小説のせいだろう。

小説の中の主人公も両親はいない。

そんな悩みを抱えながらも仲間を作り、楽しく学校生活を送って
いる。

やはり小説はいろいろなことを教えてくれる。

それに勇気づけられている気分にもなる。

しょうがないな…。

久しぶりにキッチンの前に立ち、料理を作り始める。

作るのは炒飯だ。

なんとなく、冷蔵庫の材料と睨めっこをして決めた。

前に何回か作ったことがある。父がいた頃、一緒に作ったものだ、と昔のことを思いだし、少し切なくなる。

いつまでも回想に浸っていると母が帰ってきてしまうとふっきり、手際よく材料を切り始める。油をしいたフライパンにご飯を乗せて挽き肉やら人参、玉ねぎと材料を入れていく。

ぱらぱらの炒飯が出来た頃、母が帰ってきた。

おお、何なになんか作ったの？すごいじゃん！

久しぶりに褒められて少し照れ臭かった。

今日は自分の休日の中でもそこそこよかったのかも知れない。

一つ、気づいたのは僕がドラマやアニメ、小説にとっても影響されやすい性格だと言うことだ。

最後に一つ言いたい。

炬燵には人を寄せつける魔力が存在するのではないだろうか。

そして、必ず睡魔に襲われる。

これはもう因果的なものなのだろうかと思う。

（後書き）

ここまで読んで頂き、心より感謝します。

次回作は連載小説を掲載していく予定なので、その際はよろしくお願ひします。

感想は次回作に生かしたいと思ひます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0608r/>

「休日」

2011年10月8日07時49分発行